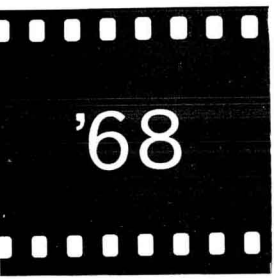

年鑑代表シナリオ集

シナリオ作家協会編　ダヴィッド社刊

年鑑代表シナリオ集
一九六八年版

一九六九年六月一日初版発行

定価 860円

©編者 シナリオ作家協会
発行者 遠山直道
印刷所 東銀座印刷出版株式会社
松本精喜堂

発行所 株式会社 ダヴィッド社
東京都新宿区簞笥町三九
振替 東京六三一四四番

Printed in Japan

ドレイ工場　武田　敦／小島　義史・・・・三
絞　死　刑　田村／佐々木／深尾／大島・・・四四
黒部の太陽　井手　雅人／熊井　啓・・・・七八
藪の中の黒猫　新藤　兼人・・・・・・・・・・・一三〇
初恋・地獄篇　寺山　修司／羽仁　進・・・・一五一
首　橋本　忍・・・・・・・・・・・・・・一七四
日本の青春　廣澤　榮・・・・・・・・・・・・二〇六
肉　弾　岡本　喜八・・・・・・・・・・・・・二五四
神々の深き欲望　今村　昌平／長谷部慶次・・・・二八五
祇　園　祭　鈴木　尚之／清水　邦夫・・・・三三八
砂の器〈特別賞〉　橋本　忍／山田　洋次・・・・三六九
作品解説・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・四〇八
一九六八年度シナリオ作家作品一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・四一六
一九六八年度シナリオ関係受賞一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・四二三
雑誌掲載シナリオ一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・四二四
映画関係出版書籍一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・四二六
シナリオ作家協会会員住所録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・四二七

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

「ドレイ工場」製作上映委員会作品

ドレイ工場

武田敦
小島義史

スタッフ

製作	「ドレイ工場」製作上映委員会
原作	「東京争議団物語」より
総監督	山本薩夫
監督	武田敦
撮影	義江道夫

キャスト

委員長	木村愡
副委員長	渡辺晃三
書記長	横井徹
谷山久次	前田吟
佐賀竜一	草薙幸二郎
馬場修	陶隆
林春男	松田光弘
渡会専三	宇野重吉
松江	北林谷栄
春	中原早苗
いく子	杉村春子
光子	日色ともゑ
白石社長	志村喬
土屋工場長	河野秋武
宇野組長	花沢徳衛

1　江戸川、河口附近の土手下（夜）

夏、土手をかけおりる谷山たち。

江戸川の河口が、月明りに光り、背丈ほどもあるよしが黒々と一面に生い茂っている。

がさごそと、よしの茂みの一角が割れて、ぬっと現われる黒い人影――谷山久次（23）。

谷山、ぴたりと足をとめると、後方の茂みにうずくまる。林（16）、渡会（20）、速水（22）をふり返り、

谷山「（唇に指を立て）しーっ」

夜目にも、くっきり、よしの茂みのかげに、スポーツカーが一台止っているのが見える。

さっと緊張する速水たち。

林「（がたがた震えながら）谷山さん、俺、おしっこがしたい」

谷山「（目を三角にして）バッキャロ、早くしろ、早く」

林、あわてて前のボタンをはずす。

谷山、前進すると、じっと、すかし見る。

車の中で、若い男女が、ぴったりと抱き合っているのが見える。

谷山、振り向いて、にやりと笑い、前進の合図。とたんに、よしの根に足をとられて、谷山「わーっ」という悲鳴と共

に、附近の水たまりに落ちる。
パッとつく車のライト。その光が、びしょ濡れになった谷山の情けない姿を浮びあがらせる。
あわてて、エンジンを始動させ、ぐんとスタートをきるスポーツ・カー。
ひかれそうになる谷山、危うく身をひねり、水たまりに転がって難を逃がれる。

谷山「（カッとすると）畜生！　ふざけやがって！」
車を追って走り出す。

2　土手（夜）

のぼって来るスポーツ・カー。
追って来た谷山、その前に、がばっと身を伏せる。
はっと顔色を変える、林、渡会たち。
林たち「ああッ！」
キキーッと急ブレーキをかけ、止る車。
谷山、ゆったりと体を起こすと、ドアを開け、
谷山「（ドスをきかせて）おい、手前ら、なんで俺を轢こうとしやがったんだ……」
若い男「（蒼白になり）な、なにも轢こうなんてしないよ……」
谷山「やかましい、俺の新調の洋服をこんなにしやがってよ……」
若い男「（女からうけとった金を出し）済みません、これで勘弁して下さい」
谷山「ナメんじゃねえ、この野郎。金が欲しいんじゃねえよ」
若い男「じゃ、どうしろっていうんです……？」
谷山「（車のボディをなで廻し）ゴキゲンな車だなあ、まるで、サラブレッドだぜ、（思いつくと）おい、おめちも乗れ、これから錦糸町までドライブとしゃれこもうぜ」
速水「（あきれて）あ？　おらもう結構だ」
渡会「（尻ごみして）おれも。残業続きでよ、眠たくて眠たくて……」
一緒に逃げようとする林。
谷山「林、お前はくるんだ！」
林「（遠州なまり）勘弁してくれよや、谷山さん、俺はまだ見習ずら、明日は早出でグレンの掃除をしなきゃ……」
谷山「駄目だ……同郷（くに）の先輩として、おらお前を男にする責任があるでな……来い、来いや」
げんなりした顔の林と共に車に乗りこむと、
谷山「（男に、気取って）おっ！　チミ、気をつけてやってくれ給え」

3　錦糸町・繁華街

バーや、飲み屋のネオンがまたたいて―

4　バー〝城〟・内（夜）

カウンターでビールを飲む谷山と林。
マダム「こちらおビールね」
ボーイ「はい」
マダム「あら、いらっしゃい谷山チャン」
谷山「あ、ママ、くにの後輩だ。（林に）おい、遠慮せずに、じゃんじゃん飲め、勘定は旦那もちだぞ（ホステスにウインクする）」
マダム「（笑って）また沢野課長さんに？

達者ねえ、谷山チャンは、どうぞごゆっくり（肩を叩く）」
林　「（感心して）谷山さんは、大したグレン隊だに」
谷山「（林の額をこづいて）バカ野郎！　おれは労働者よ、グレン隊じゃねえ（胸をそらすと）おい、覚えてるずら、浜松の訓練所に貼ってあったうちの募集広告よ……」
林　「……？（意味が分らない）」
谷山「給与良し、年三回賞与、宿舎、厚生娯楽施設完備と書いてあったずら」
林　「はあ」
谷山「俺も、五年前に、あれにひっかかってよ、入ってみたらどうだィ、ぜには安い、寮に畳はねえ、厚生施設は何処にあるって聞いたら、バカヤロ便所があるじゃねえかとぬかしゃがった、畜生……」
林　「……」
谷山「（ぐっとビールをあふると）千人もの労働者がいながら、労働組合もねえ、朝から晩まで働け働けで、人間様なみに息もつけねえ。そこで考えたね、よーし、俺は俺なりに、バッチリ楽しんでモトをとってやろうってな、ヘッ。お、いいか林、ゼニは無くとも、人間、ここと（頭を指し、ポンと胸を叩いて）ここ次第よ、大船に乗った気でじゃんじゃん飲めや、ああ」
林、頷くと、顔をしかめながらも、ぐっとコップを呑みほす。
谷山「よーし、その調子、それでこそ遠州、森の石松の後輩だ」
林、うれしそうに笑う、と、入口の方を見て、さっと顔色が変わる。
林　「谷山さん、課長だに」
谷山「うん？」
マダム「どうもありがとうございました。またね」
三人連れの男――沢野課長（38）、田口（27）宮林（31）が入ってくる。
谷山見ると、ぱっと立上がり、直立不動。
谷山「沢野課長」
沢野「やあ」
谷山「先日は御馳走さんでした」
沢野「（にこにこと）いや、おかげで女房が喜んでね（田口らの方をふり返り）田口君この谷山に棚をつくって貰ったんだがね、中々どうして、本職はだしだ」
田口「ほう……」
宮林「（こびる様に）機械工場はいいですな家族的で……われわれ事務系統は、どうも冷たくて……ま、一つには、上に立つ人の人柄にもあるんでしょうがねえ」
谷山「（すかさず）課長、あの棚はこの林に手伝わせたんです。今日はそのお礼ってことで……」
沢野「（渋い顔をするが）ま、ほどほどにしておけよ、体に毒だからな」
谷山「は、ほどほどに頂戴しております」
マダム「ま、サアさん、お話はあちらあちら」
林立するビール瓶を、横眼でみる沢野。苦い顔で、田口らと、奥のボックスへ。
谷山「（林に）おう、ざっとこの要領よ、ヘッ（大ゲサなウインク）」
ボックスに陣取った沢野、田口のコップにビールをつごうとして、
沢野「ああ」
マダム「どうぞ」
沢野「あ、君は、酒はだめだったね」
田口「はあ、酒も煙草も……」
宮林「なにしろ、工場一のカタ物ですからねえ（迎合的な笑い）」
田口「いや」
沢野「（マダムに）じゃ、こちらにジュースをさしあげて……」
マダム「はい」
沢野「（ぐっとビールを飲むと）田口君、最近工場内の空気がおかしいと思わないかね……？」
田口「（けげんな顔）と、申しますと……」
沢野「（身をのり出し）極秘情報だがね……工場内に全金の秘密組織があるらしい……」
田口「ゼンキン……？」

沢野「全国金属労働組合のことだよ（探るような目で）君、詳しいんじゃないの、ふふふ……」
田口「（あわてて）え、いや、一向に……」
宮林「え？　ほんと？　勉強家で通っている君が、現場でも中堅であるべき君がさあ、そんなことでは困るよ、ねえ課長……」
沢野「うむ（半信半疑で、田口の様子を窺う）」
マダム「どうもおまちどおさまでございました」
田口「どうも」
沢野「ああ、いいからちょっと」
マダム「ごゆっくりね」
宮林「さ、課長どうぞ。全国金属労働組合、略して全金はだね、総評傘下の組合で、組合員総数二十二万一千……委員長の名は畠山宏三……」
田口「ちょっと待って下さい……（ポケットから手帳をとり出し、鉛筆をなめると）それで……？」
沢野「（田口の様子を窺っていたが）はっは　は、得意のメモが出たな、宮林君」
宮林「はい」
沢野「もっと肝腎なことを教えてやり給え」
宮林「は？」
沢野「全金が個人加盟の労働組合だということ、個人の資格で加盟できるという特徴を活かして、一人二人と巧みに職場に組織をつくる、それが強力にふくれあがって、激しい闘争をいどみかける……」
田口「……（メモをとっている）」
宮林「つまりね、労働組合のベトコンなのさ」
沢野「経営者にとっちゃ、疫病神だ、うちの社長も大変神経質になられてね……」
田口「で、何名位が加盟してるんでしょう……？　機械、鋳造、製鋼と別けて……」
沢野「それが分る位なら苦労はせんよ……とに角、危険な芽は見つけ次第、踏みつぶすことだ……君たち大学出は、将来の幹部だくれぐれも工場内の様子に注意してくれ給え（谷山の方を顎でしゃくって）あいつらとは違うんだからね」
谷山が、いい気嫌でホステスと踊っている。

5　関東鉄工工場

江戸川の河口を背にして建つ、大工場。製鋼、鋳造、機械の三工場が広場を中心にコの字に取り囲んで建っている。
鋳造工場の一角から吐き出される、どす黒い煙が、どんよりと空をおおっている。

6　同、機械工場・内

さまざまな機械の音が、わあんと工場いっぱいに拡がって―大型小型旋盤、プレーナー、研磨機、ボール盤等々が唸りをあげて廻る。
働く、新田、関たち。
須本「ハイ注ぐ、ハイ押す」
田口「ドリルの具合はどうかな」
新田「仕事の方はまかしておけって、ハハハ」
田口「材料にワレが入ってなかったか」
関　「うん、大丈夫だ」
須本「ハイ、キリコが溜ってる」
新田、関たち、鋭く笛を鳴らし、両手でグレーンにサインを送りながら、谷山の旋盤に材料をおろす。グレーンの下の林、大きなあくびをすると、しょぼついた目をこする。
谷山「おう！　今夜も武者修業にゆこうぜ」
林　「えっ！　今夜は九時まで残業ずら」
谷山「丁度、いいお時間よ、今夜はな、紡績女工の寮だィ、若い娘が三百人、ヘッよりどり、みどりだィ」
林　「今日は勘弁してくんない、もうくたくただに……」
谷山「おい俺たちの仕事はな、出来高払いのお前、請負制だ、だからといってじゃんじゃん、あおると、一個当たりの単価を下げて来やがる、仕事なんて適当にやっていりゃいいのよ、適当に……」
四十呎の大型旋盤に取り組む佐賀、先手

の三島（17）に手まねで、機械を見てろと命ずると、工具箱を開ける。
佐賀「三島、みてろ」
工具箱の中に、ずらりと並んだ、酒瓶、ウイスキー瓶、佐賀、一本を抜きとると一気にラッパ飲み。
須本「昨日はついてなかったぜ、おら5、6はかてえと思ったんだがよ、あの野郎腹でも降したんじゃねえのかなあ」
佐賀「ああ、オカシイなあ」
三島、見廻りに来た沢野課長と組長の高島の姿を見ると、
三島「（大声で）佐賀さん、課長と組長が来た！」
須本「あ、いけねえ」
佐賀「（じろりと見やり）ふん……（鼻を鳴らすと飲み続ける）」
沢野たち、苦い顔で、見て見ぬふり、通りすぎてゆく。
高島「課長、正面盤の方へどうぞ」
査定表片手に、各機械を廻る田口は、機械ごとに、仕事の進捗状況を査定表に記す。旋盤の故障を直している大村（23）の傍に寄ると、
田口「大村さん、また機械がいかれたのか？」
大村「（東北なまりで）懲罰用の旋盤だからな、賃金に文句をつけた、みせしめっう訳だ。駄々ばっかりこねやがって、人の半分も削れねえ……会社の奴、頭下げて来るのを待ってるだべ（明るく笑う）」
田口「大村さんの分は、材質が固かったことにして、単価をあげておきましょう……」
査定表に書きこむ。
大村「田口！」
田口、人の気配に、はっとして顔をあげる。
沢野と高島が、厳しい顔で近づく。
田口、一札をすると素知らぬ顔で、隣の機械の方へ。
高島、大村の仕事をみつめる、と、通りかかった林を見て
高島「（目を光らせて）おい林、何処いくねん」
林「（ぎくっと立ち止ると）しょ、しょんべんす」
高島「あと二十分で休憩やないか」
林「そう思って我慢したんですけど（前を押えると悲鳴に似た声で）ああ、もう、我慢がしきらん……」
高島「辛抱せい」
大村、林のそばに寄る、やんわりと、
大村「ああ林、こいや、俺も我慢できねえ、さ、いこいこ」

7　同、鋳造工場・内

小型電気炉からほとばしり出る灼熱の湯。
煙と黒鉛の粉末が、もうもうと立ちこめる中で働く鋳造労働者、汗と黒鉛で、顔が真っ黒に光っている。
その中に、塚本（28）、稲垣（27）、土井（23）、渡会専三（52）。
トランジスターのイヤホーンを耳にはさみ、鋳型に湯を流しこむ塚本、作業の手をとめると、トランジスターから流れる経済市況に聞き入る。
塚本「（顔色を変えて）亜細亜製鉄、二十二円安か……畜生！」
思わず、持っていたラジオのイヤホーンをぬく。と、ぽんと肩を叩かれ振向く。田口が立っている。
田口「（にこにこしながら）塚本、ちょっときびしくなって来た、株をやっているヒマは、なさそうだよ」
手にした紙片を、巧妙に塚本の手に握らせて行ってしまう。
さっと緊張する塚本、あたりを窺うと、ポケットに紙片をすべりこませ、何喰わぬ顔で仕事につく。そのうしろ姿をじっとみおくる組長の宇野。

8　同、機械工場、便所

「ドレイ工場絶対反対」「要求！　一、睡眠、二、金、三、飯、四、女」「働かして儲け、社宅、寮費で儲け、食堂で儲

け、太るは社長ばかりなり」「ああくさいくさい、働くのがバカクサイ」
等々の落書き。
「安全パトロール」の腕章をつけた、二階堂が、ふうふういいながら消している。
プレーナー工の新田（25）、組立工の関（25）が入って来る。
新田「（にやにやしながら）二階堂さんよ、沢野課長に、しぼられたんだべ……？」
二階堂「そのうちな、便所の戸は全部総ガラスにするんだとよ」
二人「ハハハ」
二階堂「（うんざりしたように天井を仰いで）よくもまあ、こんなくせえ所で書けたもんだ、消す身になって貰いてえな」
関「（大声で読む）二階堂の豚野郎！ スパイはやめて、せっせと便所掃除でもしていろ！か……（笑う）」
二階堂「（情けなさそうな笑いを浮べ）へへ、女房子供が見たら何つうだろうな、もう」
新田「そんじゃあ、ロッカーの中を嗅ぎ廻ったり、所持品を調べたりするのは、止めるだな」
二階堂「……」
関「そうしねえと、あんたが糞壷にドボーン、てなことになりかねえぜ、みんな気が立ってるからよ……」

9 独身寮

ベカ舟を浮べた水路に沿って建つ、二階建ての独身寮。
谷山の部屋。
二段ベッドが二つ、計四人分のベッドが、蚕棚のように並んでいる。
すさまじいいびきをかき、泥のように眠りこけている谷山。
寮の管理人、村中てる代（40）入って来ると谷山をゆすって、
村中「谷山さん！ 面会人だよ、谷山さん」
谷山、蒲団をひっかぶって、
谷山「うるせえなあ、たまの休みに……残業、残業で、こっちは死人同然だ……けえしてくれよ、その野郎……」
村中「野郎じゃないよ、べっぴんさんだよ」
がばと、飛び起きる谷山。

10 同、入口

飛ぶ様な勢いで、階段を降りて来る谷山。
光子（20）が、立っている。
谷山いぶかし気に光子を見る。
光子「（遠州なまり、切り口上で）あんた、谷山さんずら？」
谷山「（気押されて）はあ、谷山だけど……？」
光子「（じろじろ見て）やっぱり、真面目な労働者って顔でないに……」
谷山「（むっとして）何だよ、お前さんは……？」
光子「あんたね、うちの弟を変な所へ連れ出すのだけは止めてちょうだい……」
谷山「弟……？（思いあたって）てえとあんた林の……」
光子「姉の光子です」
谷山「なあんだ、林の姉ちゃんか（がらりと馴れ馴れしく）光ちゃん、そんなとこで、しゃっちょこ張ってねえでよ、さ、どんどん、あがったり、あがったり……」
光子「あ、ここで結構です」
谷山「遠慮は要らねえって、光ちゃん、同郷ずら」
光子「光ちゃんなんて、呼ばないで。あんたと逢うのは、今日が始めてだに……」
谷山「……」
光子「（きっとなって）とに角ね、うちの春男を変な所へ連れだすのは止めて頂戴、春男はまだ未成年だに」
谷山「（ニヤニヤして）ほう、変な所ってどんなとこ？」
光子「土手やバーや、女子寮……私みんな知ってるに……」
谷山「林は、結構喜んでたぜ、もう年頃だに」
光子「……（にらむ）」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

谷山「こわい顔すんなよ。よーし、一緒に浅草へでもいってよ、光ちゃんの文句とっくりときこうや、林の今後のことも相談しようぜ、な」
光子「図々しいのね、あんたって人……私はね、あんたが弟を誘惑さえしなきゃ、それでいいの、分ったわね……」
　きめつけるようにいうと、踵を返し、スタスタと出てゆく。
谷山「（あわてて）ちょっ、ちょっと待てよ、ね、お光ちゃん」
　と、塚本が、背広をきちんと着こんで出て来る。
谷山「よ、塚本さんよ、あんた株ですったんだってね……」
塚本「……（むっとした顔）」
谷山「気分転換に、ちょいと附き合いませんか、バスの車掌の寮だけんどもよ……」
塚本「（そっけなく）今日は約束があるんだ」
　そそくさと出てゆく。
谷山「（見送って）ケッ!!　なんでえ、株の亡者め!」

11　料亭〝名月〟、表

12　同、一室

　土屋工場長、沢野、宮林、高島、宇野などが集まって会議中。
土屋「……御承知のように、うちの設備は老朽化し、労務管理も前近代的だ。これでは、激しい競争のなかで、わが社が生き残る道はないと、わたしも工場長就任以来、度々社長に進言してきたんだがね、さいわい先日の役員会で、中央製鋼の系列下に吸収されて、設備の近代化をはかる大方針が、決定された……」
　一同、ざわめく。
土屋「しかしだ、わが社が有利な条件で、吸収されるためにはだ、どうしても生産性と能率を向上させねばならん。それには、現在の人員でだ、四〇％の生産増強をはかる、新体制運動をおこすことになった……」
　（ざわめき）で、この際、労働者の不満が起こるのを防ぎ、労働組合など絶対につくらせてはならんと、これは社長のきついお達しだよ」
沢野「（身をのりだして）いや、僕もね、社長からお話をうかがって、身がひきしまる思いで、責任の重大さを痛感し、早速、調査活動を強化した次第だが……」
　鞄の中から、資料をとりだして、机におく。関、新田などの写真が貼られ、細かく書きこまれた調査表。
沢野「先日、諸君の協力を得て、独身寮の私物検査を極秘裡にやった結果（写真を叩く）関の行李の中からは〝階級的民主的労働組合について〟というパンフレットが、新田の抽出しからは、レーニンの本が出た……」
土屋「ふーむ、まさか、共産党じゃあるまい」
宮林「（ここだと膝を進め）工場長、私は民青、あの〝恐るべき民青〟が潜入していると思いますが、実は民青新聞が四部も見つかったんです。その一人の伊藤など、現場では、要注意にさえなっていないんですから……」
高島「（むっとして）宮林君！　ほじゃ何か？　わしの眼が節穴やいうのかい」
宮林「（うすく笑って）いやあ、僕はただ、念には念をいれて、より正確にといいたかっただけですよ」
高島「ほう……すると沢野課長が眼をかけてはる谷山な、あいつの机の上にも、民青新聞があったそうやけど……へへ、あれもその恐るべき民青やいうのかい……沢野課長の眼も節穴やと」
宮林「とんでもない。課長！　僕はですね、課長がいつもいわれるように、調査対象である人物の日常の言動、交遊関係、それに趣味、読書傾向等、すべて調査を総合して判断しようと……」
高島「へッ、大学出は口がうまいわい」
沢野「（一喝する）いい加減にし給え、ええ君たち、工場長の前でみっともない」

しゅんとなる高島、宮林。
ふすまを開けて、女中が顔を出し、
女中「ごめん下さいませ」
沢野「ああ」
女中「宇野様に、お客様がお見えになりました」
宇野「ああ、そう、じゃちょっと」
沢野「あ君、ちょっとちょっと」（宇野に耳うちする）

13　同、他の一室

女中「ごめん下さいまし、こちらでございます。どうぞ」
がらりとふすまをあけて、宇野が入って来ると坐りながら、
宇野「やあ、待たせて済まん、済まん、えーこらしょっと。親爺たちと、ちょっとこみ入った話があったもんだでな……」
塚本「親爺たち……？」
宇野「工場長よ……あ、そうそう、お前はえらく工場長に見込まれているだなあ」
塚本「……？」
宇野「現場の若い者の中では、塚本が一番頼りになるって、そういってたい。おらあ鼻が高いわい。何んたってお前を工場に入れたのは、このおらだからなあ」
塚本「それで話というのは……？」
宇野「まま、そうせくなや……ええ話だで（酒を飲みながら）お前訓練所じゃ、旋盤をやっただな」
塚本「ああ、こう見えてもトップで出たんだ（自嘲的に）それが、今じゃ、いもの屋だもんな」
宇野「工場長がいっていたんだ、塚本を旋盤に廻しちゃどうだってなあ」
塚本「……（警戒する目つき）」
宇野「おらだって、お前を鋳造からぬかれるのは惜しいけんど、いもの屋なんて、何時までもやる仕事じゃねえ、黒鉛と煙で、はらわたまで真っ黒になっちまうんだ、第一、いもの屋じゃ、つぶしがきかねえもんなあ」
塚本「（盃をあおると）一体、ねらいはなんですね？」
宇野「（うろたえて）う、う、ねらいか？」
塚本「（うすく笑って）会社が無条件で、うまい話を持ちこむわけがない……何をしろっていうんです……？」
宇野「い、今、つきあっている仲間と縁を切ることよ」
塚本「つきあってる仲間……？」
宇野「おー、全金の連中よ」
塚本「（一瞬ひるむが、すぐ平然と）そりゃあ、割りにあわない取引きだなあ」
宇野「おい、塚本！　お前、工場をクビになりたいか、全金はみんなクビだぞっ」
塚本「（うすら笑う）おれをクビにするだけの証拠が、ありますかね……それにねえ、旋盤に廻してくれんでも結構ですよ……（意味深重に）鋳造は、おれの思いどおりになる、居心地のいい職場だで」
宇野「……（じっと塚本の顔をみつめると、いきなり笑い出す）はっははは、お前は大した野郎だ……塚本よ！　頼むからには手ぶらじゃ、頼まねえよ（ポケットから札束を出すと、ぽんと前におき）ほら工場長がくれたんだ」
塚本、動かない。
宇野「へへへ、お前、株に手を出して、すってんてんになってお袋への仕送りにも困っとるんだろうが……さ、さあ、とっといてくれや……」（かしわ手をうつ）
芸者「いらっしゃいませ」
宇野「じゃ、まあゆっくりしていけや。おれまだ用があるでな、おい、サービスたのむぞ」
芸者「はい、お兄さん、おひとつ如何」

14　機械工場・内

「生産増強、新体制運動」の横幕。
佐賀が笛を吹き、手で合図を送る。
材料を吊ってグレーン、うまく動かない。佐賀、舌打ちすると、きっと見上げ
佐賀「（怒鳴る）馬鹿野郎！　しっかりしろい」
グレーン運転室で、なれない手付きで操作する林、緊張と疲労で目が血走ってい

る。
見廻りに来る高島。
高島「調子、どないや？」
佐賀「新体制か何だか知らねえがよ、見習いのグレーン下が、いきなりグレーン運転とは無茶な話だよ」
速水「（横から）機械工がグレーン下を兼ねるなんてのも、キツイよなあ」
高島「そうでもせんことにゃ、会社が成り立たへんのやないか。会社が潰れてみ、みんなクビやないか、どない思うとんね」
佐賀ぶいと横を向くと、激しく笛を鳴らす。
汗みどろになって何回も試みる林。
やっと機械に乗る。
にっこり林を見上げて合図を送る佐賀。
ぐったり坐りこむ林。
汗をふき、グレーンを左へ動かす。
目を光らせて、工場内を巡回する高島。
関の作業場に来ると、つと、足を止める。
関の隣の作業場に、部品が山と積まれている。
高島「関、何してんねん……？」
関「グレーン下をやるのは始めてなんでね、はかどらねえんだ」
高島「他の奴、みんな、すいすいやっとるやないか……」
関「（ぶいと横を向く）」
高島「（気色ばんで）お前、やる気ないのやろ」
関「……」
高島「オイ、どこ行くねん」
関「便所、おトイレ」
高島「よーし分った、ということは、社の方針に反対ちゅうこっちゃな、課長に報告するぞ、ええな……」
関「……」
影山「どうしたんだ」
グレーンが宙吊りのまま、ストップしている。
はっと顔色を変える。林が運転室から這い出してグレーンのレールづたいにギアの方へ、そろそろ歩き出す。
影山「あ、危い！」
谷山「（笛を吹きならして、大声で叫ぶ）林、止めろ、降りて来い」
林、構わず、そろそろとレールづたいに歩む。
大村「林、止めろ」
林、ギアに辿りつくと点検を始める。
その顔がほころびると、見守る谷山たちに、故障個所発見を手まねで報せる。
谷山たちの顔に、ほっと安堵の色が流れる。
林、浮々しながら、故障個所の修理を始める。
と、はっと気づいた瞬間、ギアが、がっと林の腕をくわえこみ、物凄い力で、ぶん廻す。
ギアに、腕を噛み切られ、空中に抛り出される林。
林「ギャーッ！」
恐ろしい悲鳴を残して、林の体は大きく弧を画いて、空中で一回転すると、真逆様にコンクリートの上に叩きつけられる。
大村「林！」
一瞬、棒を呑んだ様に、突っ立つ谷山たち。
谷山「（はっと我に返ると）林」
血相を変えて走り寄る。
谷山「林！」
その後から、どっと駈け寄ってゆく労働者たち。
谷山、林の体を抱いて。
谷山「（血を吐く様な声で）林！　しっかりしろ林ッ林！」
恐怖と苦痛に顔をゆがめて、こと切れている林、血が一面に流れ出る。
谷山「しっかりしろ、林、林！」
谷山「バカヤロ、バカヤロ、バカヤローッ……
…クソ真面目によ、この野郎ッ……」

肩を震わして号泣する。

谷山「畜生！」

15 独身寮・一室（夜）

形ばかりの祭壇。

林の遺体の前に、大村、新田、関、佐賀、馬場たち。

光子が、目を泣きはらして坐っている。

新田「ムゴい会社ぞな……沢野が社長代理で、五万円の香奠をおいてったきりだ」

村中「……一体、見舞金や保証金はどうなるんだろうねえ……？」

大村「おれたちが力でとらねば……出すもんは舌もだしたくねえって会社だ……」

馬場「全く俺たちを何だと思ってやがるんだ」

谷山、ぐでんぐでんに酔って入って来るなり、

谷山「ちえっ、みんな、しけたツラしやがって（一升瓶をぐいと突き出し）これでもひっかけてよ、景気良くやるべ」佐賀の傍に、でんと腰をおろすと

谷山「うん、佐賀さん、一ぱいいこう……」

茶碗に酒を注ぐ。

佐賀「馬鹿に御機嫌じゃねえか……」

谷山「ああ、沢野課長と飲んで来た……へッ、こいつも課長からのぶんどり品よ……」

佐賀「沢野から……（じろりと谷山を見る）止めとこう、気がすすまねえ……」

谷山「（鼻白むが）そうかい……（光子の方を向くと）光ちゃん飲めや、くよくよしたって仕方がねえ、林もああ云う事故を起こすなんて、運が悪かったのよ……（茶碗を突き出し）さ、ぐっとやんな……」

光子「……」

関「よせよ、谷山……」

谷山「……？（どろんとした目で関を見返るが）光ちゃん、元気出してよ、この間の時みたいにおれを叱んなよな……先輩がついていながら、どうして、うちの弟を殺したんだって……さ、ぐっとあけなよ……」

関「（激しく）よせったら、よさないかい！」

谷山の手から茶碗をひったくる。

谷山「（かっとなると）何ィッ……手前、やる気か……」

関「谷山、お前、林は事故死だ、運が悪かったんだと云ったな……なにが事故死だ、林は会社に殺されたんだ」

谷山「殺された……」

関「おー、たった四カ月の見習がよ、馴れねえグレーンに追いあげられてよ、これじゃ殺されたも同然だ」

谷山「ふん、云うじゃねえか、ラッパ野郎……」

関「何を、沢野の腰巾着め！」

谷山「何ッ！」

いきなり、関のほほをぶんなぐる。

佐賀「やめろい！」

ぱっと、後から羽交締め

谷山「（もがきながら）偉そうなこと云いやがって、手前、林がグレーンにあげられた時、反対したのか……ふん、林は、まだグレーンが無理だってことは、誰だって分ってら、だけどよ、おれたちん中で、誰が反対した……みんな手前の仕事の能率あげるために、おろおろする林を叱り飛ばして、あふってたじゃねえか、畜生！」

関「……」

じっと谷山をみつめる光子。

谷山「俺が課長の腰巾着なら、手前らは、何だイ、嫌だ嫌だといいながら、せっせと客をとっているパン助みてえなもんじゃないかイ……（ぐっと酒をあふる）おらな、いま課長にかけ合って来たんだ、弔金出せって、ところが野郎のいうことにゃだ……会社はこう云う時のために労災保険をかけてあるんだ、五万円出すだけで有り難いと思えってな……頭に来たなあ、もう……だけどよ、今のまんまじゃ、腹立てるだけで、どうすることも出来ねえじゃないか」

しーんとして、谷山をみつめる大村たち。

谷山、ごろりと横になると、

谷山「畜生、みんな出て行け、プー、今夜は、林と二人でよ、とっぷりと飲み明かすんだイ」
大いびきをかき始める。
大村、敷いていた座布団をはずすと、そっと谷山の頭の下にあてがってやる。
馬場「(しんみりと)谷山の気持ち、分るような気がするな……」
大村「(大きく頷くと一升瓶をひき寄せ)折角、谷山がとって来てくれたんだ、おれたちも林と一杯やるべよ……」
関「……(頷く)」
光子「あたしも、飲む……」
関から、茶碗を受け取り、ちょっと口をつけると、急に堰を切った様に泣き出す。
光子「(泣きじゃくりながら)春男は、本当に良い友達に囲まれて、倖せだった……もっと、長生きさせてあげたかった」

16 工場正門前

〝この度、次の人たちが、大阪営業所に転任することになりました〟の貼り紙。五名の名前の中に、関義雄、新田定の名前。

17 同、機械工場・内

「安全パトロール」の腕章をつけた、高島と二階堂が工場内を巡回する。
高島「オイ、社長の見回りや、判ってんな(くり返して歩く)」
高島「谷山、お前こんなとこで何しとんねん」
谷山「はあ、モンキーを借りに来たんです」
高島「なにイ」
谷山「あ、社長さんやで、早う行かな、モタモタしたらあきまへんでエ」
作業服を着た白石社長が、土屋・沢野に案内されて来る。
あわてて社長の方へ飛んでゆく高島。
土屋「ご承知のように、新生産運動の成果は仲々よろしいようで、この一週間を例にとりましても、機械工場15パーセント、製鋼、鋳造共に17パーセントと着実な伸びをみせております」
白石「あそう、ご苦労さん」
白石、見回りながら、速水の機械の傍に来ると、ひょいと腰をかがめて切り粉をつまみあげる。
白石「(沢野に)大分、薄いようだね」
沢野「(緊張して)はっ、今やって居りますのは、材質が固いものですから……」
白石「もう少し合理的な削り方がありそうなもんだが……」
云い捨てると、ずんずん歩いて行く。
と、白石の前に、新田と関が立ちふさがる。
新田「社長ッ! ちょっとおき聞きしたいことがあります……」
沢野「君!」
白石「(おだやかに)あ、いいいい、何だね……?」
関「今度、大阪営業所へ転勤を命ぜられたんですが、一体どうして、わたしたちが選ばれたんですか……?」
土屋「(顔色を変えて)あ、君ッ! そんなことは、社長にお尋ねすることではない。不審な点があれば、私か沢野課長の所に聞きに来給え……」
白石「(にこにこして)君たちが優秀な技術者だから、工場長が白羽の矢を立てたんだろう……誇りに思わなくちゃいけんよ……」
新田「でも、大阪は、営業だけじゃないんですか?」
白石「ああ、そうだ」
関「おれたちは、技術者ですよ、工場もないのに……」
白石「ヨハネ伝に、少ししかまかざるものは、少ししか刈りとらず、ゆたかにまくものは、ゆたかに刈りとる……と云う言葉がある、人間どんな仕事でも、神から与えられたと思って、不平不満を云わずに一生懸命やらにゃ、いけんよ……分ったね」
云い捨てると、土屋をうながして、出口の方へ。

関　「（憤然と）社長ッ！」
　沢野、前へ立ちはだかると、
沢野「君ッ！　会社には会社の方針があるんだよ、一々文句はつけないことだね（高島に八つ当り）高島君、注意してくれ給え、全体に能率が落ちているよ」
　そそくさと、白石の後を追う。
白石「あの連中かね？」
土屋「はい」
　高島、関たちをにらみつけると、つかつかと、速水の傍に寄り、切り粉を拾うと
高島「（突き出して）速水ッ、何じゃイ、お前の切り方は、もっと部厚う能率をあげんかイ……」
速水「はい」
　速水、うろたえると、あわてて旋盤を操作する。
　と、バイトが、パーンと割れて、すっ飛ぶ。
高島「（目を怒らして）このタンガロイ、何日目や！」
速水「（おずおずと）十日目です」
高島「十日？　社長通達で二十五日以上使えって、おぼえとるやろ」
速水「はい……（うなだれる）」
高島「おぼえとったら始末書、書かんかイ、書かんかイ！」
　じっと様子を窺っていた大村、唇を噛むと、旋盤のギアを回し、ぐんと回転をあげる。
　パーンと割れてすっ飛ぶ大村のバイト。
　大村、機械を止めると、谷山の方を見てにやっと笑う。
谷山、頷くと旋盤の回転をあげる。
　音を立てて、すっ飛ぶ谷山のバイト。
　と、渡会のバイトが飛び、続いて伊藤のバイトが飛ぶ。
高島「（見るなり、かっとして）お前らは！」
　つかつかと、谷山の傍へ寄る。
　次々と回転をとめる旋盤。
　唇をわなわな震わせ、突っ立つ高島。
谷山、佐賀の方を見やる。
　苦笑する佐賀。
　ぐーんと佐賀の旋盤の回転があがり、すっ飛ぶバイト。
　次々と機械が止り、工場内が異様に静まり返る。
　佐賀、ゆったりと高島の傍に寄ると
佐賀「組長さんよ、はばかりながら、この俺は、工場一の熟練工だがよ、今日ばっかりは、十年ぶりにバイトを飛ばしちまったよ……始末書を書かしてくんな、書かしてくんなよ」
　高島、顔色を変え、後ずさりすると、踵を返して、事務所の方へ駈けこんでゆく。
一同「ハハハ」
　顔を見合せ、洪笑する大村、谷山たち。
　暖い感情が、お互いの胸から胸へと伝わってゆく。
谷山「モタモタしたら、あきまへんでェ」

18　地区労一室（夜）

　テーブルを囲んで会議をしている二十数人の労働者。
　大村、田口、塚本、関、新田らも居る。
塚本「（滔々と弁じている）今度の関や新田の大阪配転は、明らかに組合を狙った敵の先制攻撃だ、会社は続いて大村さん、田口君あたりを九州に飛ばすという噂じゃないか。このまま、おれたちが泣き寝入りをしたら、それこそ会社の思う壺だ。組合員は次々に狙いうちにされてよ、おれたちの組合は、陽の目も見ずに潰されちまうんだ……」
関　「（にやにやして）へえー、何時も慎重論の塚本さんが、今日はいやにぶつじゃねえか……」
塚本「（むきになって）関、それはどういう意味なんだ」
関　「ははは、いや、今日ばっかりは、おれもお前と同意見だってことさ……（立ち上がる）工場の仲間たちはよ、もう我慢しきれんのだ。その証拠が今日のバイト闘争よ、みんなが職制とバッチリとケンカをぶ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com